

## 生田長尾の国に住みたい

辻 憲男（文学部教授）

神戸という地名は生田神社の神戸（かんべ）から起こった。「戸」は神社に奉仕する大家族の集団のこと。明治以前は神戸村といった。

祭神は太陽の女神、稚日女命（わかひるめのみこと）。アマテラスオオミカミの分身という。御子が八人、一ノ宮から八ノ宮までであった。三ノ宮の地名もここから。伝説によると、オキナガタラシヒメが船中に祭っていたが、大阪湾で船が急に進まなくなった。占うと「われは生田長尾の国に居らむ」とのお告げ。海山が近くて温暖なのが気に入ったのだろう。広田、長田、住吉にもそれぞれ神を祭った。西宮の広田社は女神の戦闘的な荒魂（あらみたま）、神戸の長田社は託宣の神コトシロヌシ、大阪の住吉大社は航海のツツノオ三神である。生田社では雨乞いや災害、疫病退散を祈願した。

その船はミヌメの神の教えにより、摂津能勢（のせ）のミヌメ山の杉を切って造った。牛の鳴くような大きな音がして止まったので、この岬に船を留めて祭った（『摂津国風土記』逸文）。敏馬崎（みぬめのさき）は白砂青松の浜辺で、万葉の柿本人麻呂、山部赤人、大伴旅人らの歌がある。平安時代は、ここで朝鮮の使節を出迎え、生田社で醸した酒をふるまった。

オキナガタラシヒメは神功皇后（じんぐうこうごう）。『日本書紀』はこの巫女王を、3世紀前半のヤマタイ国の女王ヒミコに当てて記述した。



灘区岩屋の敏馬神社。この崖地が昔の岬で、社前を臨ノ浜といった。